

# おじいちゃん・おばあちゃんに聞いてみよう

## 林幽寺の薬梅

およそ二百四十、五十年のむかし。天王村の林幽寺（今の祇園町・林入寺）の和尚さんは、ある夜、本堂の前に一本の梅の木が生えてきて、美しい花を咲かせる夢を見た。

よく朝。和尚さんが、朝のおつとめに本堂へ行ってみると、夢に見た梅の木が、枝を下向きにして立っていた。

「ゆうべの夢は正夢だったか。不思議なこともあるんじや」和尚さんは、喜んで、この梅の木を大切に育てた。

ある年のこと。島田の宿に、流行病が出た。それは、たちの悪い風邪だった。たちまち宿場うちに広がって、どこの家でも、病人をかかえて困りはてていた。

医者は大忙しで、病人みんな診るほど手がまわらない。ある夜。和尚さんの夢まくらに、お寺のご本尊が現れて、

「和尚。宿場のみなの者が病で苦しんでおる。庭の梅の花と葉をせんで飲ませるがよい。おそろしい流行病もたちまち治るであろう」そう言って、すつと消えていった。

夜がけると、和尚さんは宿場うちに夢のおつげを知らせて回った。

人々は、われもわれもお寺に押しかけた。（こんなに大勢やってきたでは、間に合わん。たちまち花も葉もなくなってしまうわい）と和尚さんは心配していた。

ところが、とつてもとつても、梅の花も葉もなくならない。（ご本尊の御利益じや）和尚さんは、手を合わせ、お経をとなえた。

梅の花と葉をせんで飲んだ病人たちは、たちまち起きだせるようになり、流行病は梅の木のおかげでびたりと収まりました。人々は喜んで、お寺にお参りしていた。

その後、この梅の木を「薬梅」と呼ぶようになったという。



林入寺境内の薬梅



林入寺住職 五藤秀典さん (祇園町)

生命力の強さを感じています

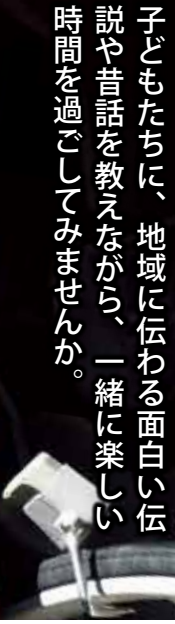
昭和35年頃、薬梅が一度枯れかけて、紅梅をつぎ木したそうです。今では、上の方が赤く、下の方が白い、紅白の花を咲かせます。本当に強い生命力ですね。また、ご本尊様の傍らには、枯れる前の梅の実もおまつりされています。

第四小学校の児童たちが、薬梅を題目に演劇をしてくれたこともありました。境内では、児童の皆さんが、先生が作詞・作曲した「夢の梅」を披露してくれました。何よりのご供養になったことでしょうか。

皆さん、おじいさん・おばあさんと一緒に、薬梅を見に訪れてくれることを、心から楽しみにしています。



子どもたちに、地域に伝わる面白い伝説や昔話を教えながら、一緒に楽しい時間を過ごしてみませんか。



# しまだの民話マップ



こりん  
五輪さん (川根町抜里)

抜里の入り口から続く散歩道。かつて、裁判の結果を誤解し、自害してしまった地主とその使用人を供養して建てられた「お堂」がある。



笹間渡の六地藏  
(川根町笹間渡)

笹間渡集会場の隣に祀られ、一つの四角い石に、六体の地藏が彫られている。「子安観音」「子育て観音」として信仰されている。

にげんやほうこうどう  
二軒屋放光堂  
(金谷泉町)

遠く富士山を眺めながら二軒屋を見守っている。昔、夕暮れ時に近所に塩を借りに出て、狼に襲われてしまった子どもを供養している。



しらふじつか  
白藤塚 (野田)

市民病院近くの鶉田寺前で、藤の木が杉の木に巻き付いている。この藤は、昔「島田小町」といわれた白藤という女が身投げして、芽が出てきたという。



⑥野守の池の赤牛

②市ヶ島薬師堂の由来

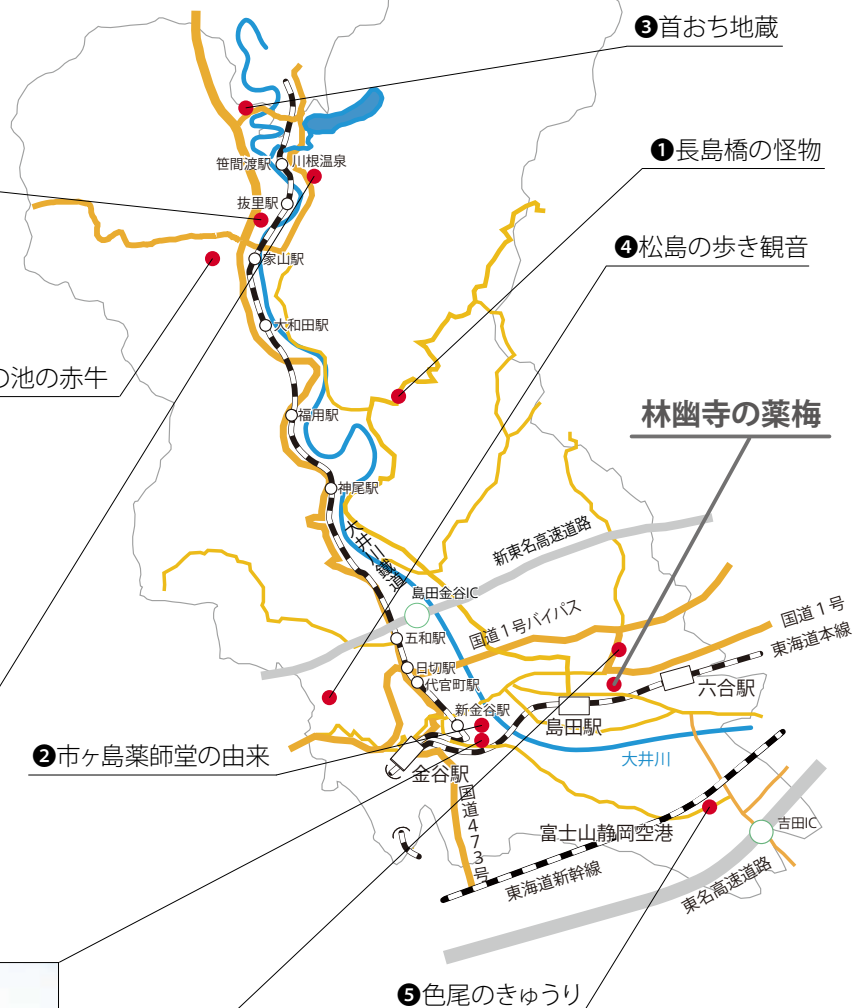
⑤色尾のきゅうり

③首おち地藏

①長島橋の怪物

④松島の歩き観音

林幽寺の薬梅



## 民話集の紹介

▼紹介した民話は、いずれも合併前の島田市・金谷町・川根町の教育委員会が発行した、民話集に出てくるお話です。今回は、容易に現地にとどりに着くことができるお話を抜粋しました。ぜひ、ご家族で足を運んでみてください。なお各民話集は、市立図書館で借りることができます。



川根町教育委員会  
「川根のむかし話」



金谷町教育委員会  
「東海道金谷宿昔ばなし」



島田市教育委員会  
「しまだの民話」



石風呂山の首おち地蔵 (川根町葛籠)



市ヶ島薬師堂 (金谷二軒屋)



現在の長島橋 (伊久美)

① 長島橋の怪物

ある年の夏、伊久美村の長島橋あたりに、化け物が出るとうわさがたつた。村の気の強い役人が立ち上がり、夜更けの見回りを始めたところ、大入道が現れた。火縄銃をくらった大入道は、やみの中へ。翌朝、その弾は、なぜか杉の木に刺さっていた。

その話を聞いた

村びとたちは、「ふるだぬきのしわざじや」とうわさしたといわれる。

② 市ヶ島薬師堂の由来

江戸に住む

お七は、恋人の吉三郎がいるお寺に泊めてもらうため、我が家を放火して、死罪となった。お七をあらわれに思った吉三郎は、髪を下し、西蓮法師と名を改め、冥福を祈る諸国巡礼の旅に出た。

金谷の宿に着き、大井川の川越し、小夜の中山の山越えなど、難儀を越えた喜びを得るこの地に、

瑠璃光如来を祀ることにした。

③ 首おち地蔵

村人たちによって、小高い石風呂山に移されたお地蔵様。何年か経ったころ、その首を転がして遊んでいるいたずら子どもたちを見かねた大工が、お地蔵様にお堂を作ってあげた。

ある日、同じ方向を向いて退屈そうに思った大工は、お地蔵様の首を景色の良い方に向けてやった。すると、急に首が痛くてたまらなくなったという。

⑤ 色尾のきゅうり

ある月夜の晩、色尾の里の氏神天王社の神様が、社から抜け出した。神様は、昼間のように明るいきゅうり畑をぶらぶらしていた。

ところが、垣根に向かつて伸びたきゅうりのつるにつまつき、竹が目につますり、怒った神様は、畑の垣根を全て引っこ抜いた。それから、色尾の里では、きゅうりを作るのに竹を立てなくなつたといわれている。

# おもしろ話 見つけよう

④ 松島の歩き観音

火剣坊大権現の参道に、ひっそりと立っている観音様を見た里人は、「おさびしいことだらう」と背負い、旅人でにぎわう小夜の中山峠の道端にすえて帰った。翌朝、火剣山へ草刈りに出たその里人は、びつくりぎょうてん。中山峠に移した観音様が、足を汚して、元の台座に戻っていた。

このときから、「歩き観音」と呼ばれるようになった。

⑥ 野守の池の赤牛

野守の池のほとりに、牛の姿に見える野

評判の女の行者が住んでいた。ある夏の暑いころ、池一面の水が赤くなり、池のまわりで災難が起きはじめた。秋には、牛が血へどを吐き、村人の間でも急な熱や赤い便が出る病が広がり、苦しめた。行者から「池を汚したからだ」と説かれた後は、村人が、池のまわりで汚れ物を洗い流すことはしなくなった。

地域に伝わる伝説や昔話は、子どもたちの魅力の宝庫です。



野守の池 (川根町家山)



色尾の氏神天王社 (阪本)



松島山岩松寺の歩き観音 (菊川)